

2022年10月4日

放課後等デイサービス事業を創業する動機

2007年（平成19年）戦後における学校教育法の大幅な改正に伴い、障がいのある幼児児童生徒への支援体制が抜本的に見直され、「特殊教育」から特別支援教育への転換が行われた。「場の教育」から一人ひとりの教育的ニーズに応じた支援がやっとスタートする。

それまでの重度・重複、軽度な障がいのある幼児児童生徒だけでなく、発達障がいやその周辺に位置する子どもたちへの、指導・支援の在り方や就学支援等が早急に求められた。

特別支援学校や特別支援学級在籍数の急増や通級指導教室の増設とともに、通常学級に在籍する発達障がいのある幼児児童生徒の急増は、一人ひとりに応じた指導・支援の高まりや保護者の大きな期待があり、特別支援教育全体の大きな課題となり、重要な責務となる。

私は、教職員として特別支援学級・特別支援学校及び行政機関等に勤務し、障がいのある幼児児童生徒の指導・支援に長く携わる中で、真剣に学ぶ子どもたちの姿や保護者の願い熱い思いを聞かせて頂き、「自立と社会参加」を目標に、多くの方々から指導・助言を頂いた。

担任当初は、専門書は少なく本屋の片隅に少しあるだけ、現在は多くの書籍が並び、手作りしていた教材やワークシートもすべて揃っている。また、多くの学校に特別支援学級及び通級指導教室が増設され、特別支援学校もセンター機能や就労支援を取組、障がいのある幼児児童生徒の自立や社会参加の推進を図っている。その中で、福祉サービスは障がいのある幼児児童生徒の支援に欠かせない存在である。特に、放課後等デイサービスは児童生徒支援とともに保護者の就労を支え、多様な機能を有する。関係機関との連携では、丁寧できめ細やかな対応が進められ、学校・保護者・利用者及び地域等との重要な橋渡しの役割を担う。

福祉事業の魅力に接するたびに、法令・条例及び学習指導要領の規定に縛られ「一人ひとりに応じた教育的ニーズ」への対応、「障害の状態や発達段階」に応じた指導・支援ができているのか、子どもたちに寄り添った支援となっているか、自問自答する日々が続いた。

第二の人生として、福祉事業への参加を考え準備を進めるが、親の介護や農業とともに、教員養成の仕事もあり、多くの時間を要する。しかし、時々出会う卒業生たちは、事業所での活動、公共施設の清掃作業、ドラッグストアの接客等、果敢に挑戦し活躍をしている。

私は、今まで学ばして頂いたことをもとに、福祉事業を創業し、社会貢献を果たしたい。

予測困難な社会が到来しようとしている。将来の社会を担う一員として、障がいのある子どもたちの自立と社会参加を推進し、その子の持てる能力や可能性を最大限伸ばすため、柔軟で多様性のある居場所づくり、障がいの状態や発達段階に応じた支援、地域活動や多様な体験活動を通じた人間関係づくりを目指し、放課後等デイサービス事業を創業することとした。

この事業を支える、多くの皆様方と連帯し、輝く将来・自立と社会参加を実現したい。